# 第3編

# 震災と伝承

消防本部の取り組み —39

リアス・アーク美術館の取り組み —45

# 東日本大震災の概要

| | |
|---|---|
| 地震名 | 平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震 |
| 発生日時 | 平成 23 年 3 月 11 日(金) 14 時 46 分頃 |
| 震央地名 | 三陸沖 北緯 38 度 06.2 分 東経 142 度 51.6 分 |
| 震源の深さ | 24 ㎞ 規模 Mw9.0 |
| 震度 | 6 弱―気仙沼市赤岩 南三陸町志津川 南三陸町歌津<br>5 強―気仙沼市笹が陣 気仙沼市本吉町<br>※最大震度 7:栗原市築館 |
| 警報 | 大津波警報(気象庁) 3 月 11 日 14 時 49 分 |

## 消防隊の活動状況

地震による直接の被害は軽微であったが、津波襲来直後から火災が発生し、救急、救助要請が相次ぎ、沿岸部に甚大な被害をもたらした。

津波が繰り返し襲来している状況下の浸水区域内で、浸水と大量の瓦礫等のため現場に接近することができなかった。更に津波により破壊されたタンクから流出した油や漂流物、船舶等が炎上しながら内湾方向へ漂着したことで複数の場所で火災が延焼拡大した。

困難な状況下で消防活動を延々と行った隊員は、疲労の限界を超えた活動となった。

消防本部屋上から見た気仙沼市内湾地域火災

津波直後の水道事業所歩道橋付近の状況

水道事業所歩道橋付近の延焼状況

車両内に取り残された要救助者の救出活動

# 受援状況

甚大な被害を受けた気仙沼市と南三陸町に、宮城県広域相互応援協定により大崎消防、登米消防、栗原消防、宮城・岩手県際相互応援協定では一関消防が発災直後から応援に駆け付けた。

平成 23 年 3 月 11 日 15 時 40 分、平成 15 年の消防組織法改正による制度創設以来初めてとなる緊急消防援助隊の出動指示を消防庁長官が行い、当消防本部管内には、9 都府県から 1,141 隊、4,317 名が派遣された。仙台市消防局も被災したため、札幌市消防局が指揮支援部隊長の任に当たり、派遣期間は 3 月 12 日から 4 月 28 日までの 48 日間という長期間に及ぶこととなった。

気仙沼市には、東京都隊、新潟県隊、山梨県隊、香川県隊、山形県隊が派遣され、東京消防庁が指揮支援隊長、南三陸町には京都府隊、鳥取県隊、兵庫県隊、秋田県隊が派遣され、京都市消防局が指揮支援隊長として緊急消防援助隊の活動管理を行った。

派遣された各部隊は、強い余震が頻繁に発生し、広範囲に瓦礫が散乱するなど容易に活動のできない最悪の環境の中で懸命に消火、救助及び救急活動等に従事した。

鹿折高架橋付近の東京都隊集結状況

鹿折地区街区消火活動

海岸線での捜索活動

ヘリコプターによる孤立者救助活動

# 悔しさを忘れずに

## 「震災と伝承」手記

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部
元消防長　　千 葉 章 一

私が、消防に入ったのは、広域消防ができる１年前。広域消防には 41 年間お世話になりました。

その間、南町大火や港町大火、住宅再燃火災、火災警報を発表し緊張した日々を過ごしたこともありました。プンヤン号アンモニア噴出事故、大川油流出事故、旅客船くろさき岸壁衝突事故、鎮火まで 11 時間要した FRP カツオ船火災等、特異で初めて経験する災害が次々に気仙沼市で発生し、その都度検証し以降の対応に活かしました。

全国的に「地震津波」に関心が低かった頃から、明治三陸地震・昭和三陸地震・チリ地震で大きな被害を被った気仙沼市と南三陸町とともに「気仙沼・本吉消防」は、「地震津波対策」に多くの時間を注ぎ、「地震津波による死者0」を掲げ他の市町にまねができないような取り組みをしてきた経緯があります。

平成 7 年に「地震・津波災害警防計画」策定し組織としての活動を明確化、平成 14 年には行政では事故があったときに処理が難しいと二の足を踏んでいた「地区単位の訓練」の先駆けとなった地区住民率先避難訓練を大島で実施、平成 15 年には「地震津波安全対策担当」職員を各所属に配置し地域に合った対策を推進しました。同年、普段の心構えやいざというときの行動を分かりやすく解説した「地震だ津波だ」の防災冊子を全戸に配布、平成 16 年から「沿岸部・山間部の行政地区ごとに地震による被害」を、住民とともに考えた防災訓練を志津川町全域で一斉に実施してきました。しかし、東日本大震災で多数の犠牲者が出た現実を見ると、もっと何かすることがあったのではと思っています。

大震災は、私たちの故郷を瓦礫の街へと化したばかりでなく、焼け野原へと変貌させました。まさに戦場、まさに地獄絵図というべき中で、住民の生命と財産を守る、その崇高な志が職員の心を支え、不眠不休の活動による限界を超えた肉体を支えました。このように、消防使命に全力を尽くし活動に耐えた職員を今でも誇りに思っています。また、東京消防庁をはじめ県内外の緊急消防援助隊等が、私たちに希望と元気をくれたことを忘れてはなりません。

気仙沼・本吉消防管内では、死者・行方不明者が2千名を超え、その中に同僚職員10名がいます。同僚が殉職するということは過去には無かったことであり、たいへん残念で辛く、こんなに悔しいことはありません。殉じた職員とご遺族には心から申し訳なく思い、組織として誠心誠意ご冥福を祈りながら「消防活動の記録」の発行や「追善供養」、「殉職職員・行方不明職員に係る説明会」、「合同慰霊祭」、「津波被災事故・再発防止委員会」等を開催しました。消防長として6人の弔辞も読ませてもらいました。

想定は想定。その数倍の被害が出ることを東日本大震災は証明しました。大きな代償を払った教訓を、忘れないでください。私は、職員の手記を見る度に涙が出てきます。

これからも３月11日は、3つの現場で手を合わせ東日本大震災のことを考えたいと思っています。

防災センター避難状況

防災センター災害対策本部の状況

## 「忘れない」
## そして
## 未来への誓い

殉職者慰霊碑（南三陸消防署）

平成 23 年 3 月 11 日　東日本大震災において日本の有史最大規模の地震と巨大津波により、東日本の太平洋沿岸各地に甚大な被害が発生し、多くの尊い人命と貴重な財産が失われた。

この大震災に際し消防活動に全力を尽くし非業の殉職を遂げた十名の仲間、旺盛な士気、強固な責任感のもと、身をもって任務の完遂に努め志半ばにして、その職に殉じられた事実を我々は決して忘れることはない。

身をもって示した不撓不屈の消防精神はまさに全国十六万消防職員の亀鑑である。

生かされた我々は、人命救助という崇高な任務を果たすべく殉職された十名の功績を末永く後世に伝えるとともに、安全への架け橋となって、天空から見守っていてくれる十名の仲間の意思をしっかりと胸に刻み、二度とこのような惨禍を繰り返さないことをここに誓う。

十名の尊霊と芳名を刻して末永く慰霊追悼の誠を捧げ、この碑を築き永久にこれを追慕するものである。

## 「記憶と教訓」
## そして
## 未来へ語り継ぐ

十名の仲間の尊い志を引き継ぎ、今後も住民生活の安全を守り、災害に強いまちづくりの実現をめざし、消防の使命達成に邁進する覚悟である。

伝承碑（気仙沼消防署）

平成 26 年 3 月 11 日

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合　職員互助会

# 「使命」そして、未来へつなぐ

平成 25 年 6 月 26 日(水)　於:福岡県北九州市

第36回全国・消防職員意見発表会にて、東日本大震災被災地本部意見として特別発表を行いました。

## 消防職員の心理

平成 23 年 3 月 11 日、巨大地震と大津波により市内各地から黒煙と火柱が立ち上がり爆発音が耳をつんざき、不安や恐怖と戦いながら過酷な消防活動をしている時でした。10 名の同僚の行方不明の情報が入ってきました。その現実を受け入れることを私はできませんでした。悔しさと絶望感の中、頭の中を整理することだけで精一杯だったことが、今でも鮮明に思い出されます。

南三陸消防署では署内で活動していた消防職員と、付近国道で避難誘導に当たっていたと思われる消防職員８名が亡くなりました。南三陸町防災対策庁舎に設置された災害対策本部に出向していた消防職員 1 名は、津波襲来に伴い屋上に退避したと思われますが、そこで命を失いました。気仙沼市本吉町で一人暮らし高齢者防火訪問を行っていた消防職員１名は訪問先の高齢者とともに水道事業所に退避しましたが、屋根を超える津波が押し寄せ命を失いました。いずれの場所も宮城県第 3 次津波の想定であれば安全と思われる場所でした。殉じた同僚との思い出は沢山あります。新米の私に消防のいろはを教えてくれた先輩がいました。悩み苦しんでいた時、背中をたたいてくれた先輩がいました。道に迷ったとき、進む先を教えてくれた上司がいました。一緒に大笑いをしながら飲み明かした仲間がいました。これからが楽しみな若者がいました。私にはいまだに信じられません。ふと、あの人たちが帰ってくるような気がしてならないのです。

発災からおよそ 7 か月後の 10 月 12 日、学識経験者を交えた「消防職員の津波被災事故検証再発防止委員会」が発足しました。約４か月間にわたる検証の末、平成 24 年 2 月に結果が全国に発信されました。その報告書の中で、消防職員は心理的に職責を全うしようという使命感から、危機を感じにくくなること、他の人々が避難誘導している中、先に避難する訳にはいかないという義務感から、撤退が遅れがちになることなどについて考察がなされています。

今般、南海トラフ地震においては想定の考え方が最悪を想定されたものに一新されました。これを受け、関連消防機関では地震津波活動計画等の見直しが検討されることと思います。そういった中、先に述べた消防職員の心理を理解した上での退避を基本としたルール作りが必要ではないのでしょうか。津波発生時の消防活動は急性期の活動にとどまらず、その後もあらゆる災害が長期にわたり発生し、長期間の活動が余儀なくされます。消防職員が犠牲になるということはこれらの活動にも大きな影響を与えることは間違いありません。何より仲間を失うことによる悲壮感は他の消防職員にも心理的に大きなダメージを与えることでしょう。津波に対する住民指導については、自宅等に戻ることなくそれぞれが最も近い高台にいち早く逃げることを事前に決めておく、すなわち三陸地方に伝承されている「津波てんでんこ」の考え方を踏襲した指導を行うとともに、早期の情報伝達による住民避難を促進していく、その上で消防職員という人材を守るための組織を挙げた取り組みが必要であると提言いたします。

あれから 2 年、被災消防本部が受けた大きな傷は未だに癒えません。しかし、災害は待ってはくれません。いつまた自然が猛威を振るうかは誰もわからないのです。私が皆さんに伝えなければならないこと、それはどうか命を大切にしてほしい。どうか殉じないでほしい、これに尽きると思います。そしてこのことを訴えていくことこそが、残された私たちの使命なのです。

# あの時の教訓を後輩に

## 震災後の取り組み

災害が発生すれば、その最前線で人命に関わる事案に対応し、被害の軽減を図ることを任とするのが消防であるが、あの災禍に職員数179名（当時）の消防本部が立ち向かうにはあまりにも非力であり、自然の猛威に恐怖と人間の無力さを多くの職員が痛感した。

東日本大震災では、地震と津波で活動拠点となるべき消防庁舎４ヶ所を失った。また、車両３台が水没、高速消防救急艇1隻が内湾の火災で焼失した。そして消防本部最大の被害は、10名の職員を失ったことであり、この悲しみは筆舌に尽くしがたく、全職員の心に深い傷を残している。

震災後これまで消防本部では、被災した庁舎の再建、高機能指令システムや消防救急デジタル無線の整備、災害用資器材の整備などハード面で整備はもちろんのこと、ソフト面の整備も積極的に行ってきた。特に、地震・津波災害活動計画の見直しは、津波襲来予想時刻の10分前には安全な場所へ退避することとし、職員の安全を確保したうえで襲来後の活動に備える「10分前ルール」を明確化し、活動の抜本的な見直しを図った。また、「消防誓いの日」を制定し、震災伝承と安全教育を継続的に行うことなど、今後も定期的な見直しを図りながら最善を追求していく。

今年で震災から11年の歳月が過ぎた。この間、新たな街並みが形成され賑わいも戻りつつある。関係各位のご活躍とご尽力によるものであり、改めて感謝の気持ちで一杯である。震災直後は人間の無力さを感じていたが、今は人間の底力を実感している。この圏域を愛し住み続ける多くの人々がいる限り、圏域の安心安全を守り続けることが消防の使命である。震災後採用職員が4割を超えたいま、あの日の過酷な活動を知る職員も減りつつあり、あの時の教訓を今後の災害対応に生かされるよう、若手職員へしっかり伝承しなければならない。

関係機関合同による災害時救急訓練　於：気仙沼湾横断橋（かなえおおはし）

リアス・アーク美術館常設展

# 東日本大震災の記録と津波の災害史

リアス・アーク美術館では、2011 年 3 月 11 日の震災発生直後から、学芸係が中心となって、気仙沼市と南三陸町沿岸部における被害記録活動を行いました。その後、3 月 23 日付で気仙沼・本吉地域広域行政事務組合教育委員会より「気仙沼市、南三陸町の震災被害記録調査担当」という特命を公式に受け、公務として 2012 年 12 月 31 日までその任に当たりました。

記録調査活動の目的は単に震災被害を記録することではなく、これまで築き上げられてきた地域の最後の姿を記録することでした。津波は文化まで奪い去るわけではありません。ただ、再生するための手掛かりを残さなければ、地域住民はそれを思い出すことができなくなります。私たちは地域再生の為に、文字通り命がけで震災を記録しました。活動に際して向き合った命題は次の 3 つです。

東日本大震災及び大津波によってもたらされた、気仙沼市、南三陸町への災害被害の実態を記録、調査し、それらを復旧、復興活動において有効に活用できるよう取りまとめること。

今後も想定される地震、津波災害に向けて、防災教育や減災教育のための資料として活用可能なように震災被害の実態を取りまとめること。

東日本大震災被災という重大な出来事を、地域の重要な歴史、文化的記憶として後世に伝えるとともに、日本国内、あるいは世界で行われている災害対策事業等への具体的な資料提供を行うこと。

約 2 年間の活動を通し、私たちは同市町内の津波被災現場をくまなく歩き、現場写真約 3 万点、被災物約 250 点、さらに調査記録書等の膨大な資料を得ました。そして平成 25(2013)年4月3日には、それらから厳選した約 500 点の資料を新常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」に凝縮し、展示公開するに至りました。

この常設展示は、「東日本大震災をいかに表現するか、地域の未来の為にどう活かしていくか」というテーマで編集されています。

リアス・アーク美術館に与えられた役割は、単に記録資料を残すことではなく、それを正しく伝えていくことです。伝えるためには「伝える意志と伝わる表現」が必要となります。私たち学芸員は、これまで美術館として蓄積してきたノウハウを駆使し、多様な視点で東日本大震災を表現することに努めました。

現場での被災物収集の様子

会場の様子　―被災現場写真や被災物が並ぶ

会場の様子　一手前の床には破裂したプロパンガスボンベをはじめドラム缶や鉄骨、漁船などがむき出しで並ぶ

展示資料は、当館学芸員が被災現場で撮影した写真 203 点、同様に収集した被災物 155 点、歴史資料等 137 点が収められています。

展示前半は【被災現場からのレポート】とし、直後からの被災現場の多種多様な状況をまとめています。また後半は【被災者感情として】【失われたもの・こと】【次への備えとして】【まちの歴史と被害の因果関係】の4テーマで構成されています。

すべての被災現場写真に、その写真を撮影した際に感じたことや考えたことなどをルポルタージュのように文章で添えています。

また、被災物は「電柱、鉄骨、家屋部材、車、漁船」などの【津波の破壊力、火災の激しさなど、物理的な破壊力等が一見してわかるもの】、また、「家電、時計、携帯電話、ランドセル、ぬいぐるみ、玩具」などの【災害によって奪われた日常を象徴する生活用品や、震災以前の日常の記憶を呼び起こすようなもの】という2種類に類別されます。

被災物には様々な立場の被災者を想定した聞き書き風の口語短文を付しています。これは震災という出来事を自分の身に置き換えて感じ、考えてもらうために、具体例を示すことによって被災物の背景を共有してもらうための工夫です。

さらに、明治や昭和の三陸大津波、チリ地震津波の写真等資料を三陸沿岸の過去の津波被害記録として紹介しています。

「風俗画報大海嘯被害録」の挿絵の一部（明治三陸大海嘯）

加えて、震災発生からの2年間、被災地で生活する中で得られた様々な情報や、調査活動から見えてきた課題、違和感などを【東日本大震災を考えるためのキーワード】として 108 つ選定して文章化し、展示資料と並行する形で添えています。具体的なキーワードには、「被災者、記憶、表現、想定外、未曽有、ガレキ、自然観、復興」などがあります。

震災の只中にあった当時、まとまりのある文脈で、起承転結を語れる時期ではないとの判断から、時系列の編集ではなく内容重視の構成としました。膨大な文字量、煩雑な資料内容となっていますが、その混沌とした現実をあえてそのまま展示する方針を選択し、現在も原状を維持しています。

時間をかけ、震災についてじっくりと考えていただける機会としていただければ幸いです。

展示写真パネル―陸に乗り上げ車路に鎮座した大型漁船群と柵に乗り上げた車

2011 年 3 月 29 日、気仙沼市浜町（鹿折地区）の状況。津波被災現場を歩くと、目にする光景の非現実性、あまりの異常さに思考が停止してしまう。常識に裏付けられた論理的な解釈ができず、一瞬、妙に幼稚な思考が顔をのぞかせる。「巨人のいたずら…」、などと感じたりするのだ。実際、そんな程度の発想しかできないほどメチャクチャな光景が果てしなく続いていた。

写真に添えたコメント

津波っつうの、みな持ってってしまうべぇ、んだがら何にも残んねえのっさ・・・

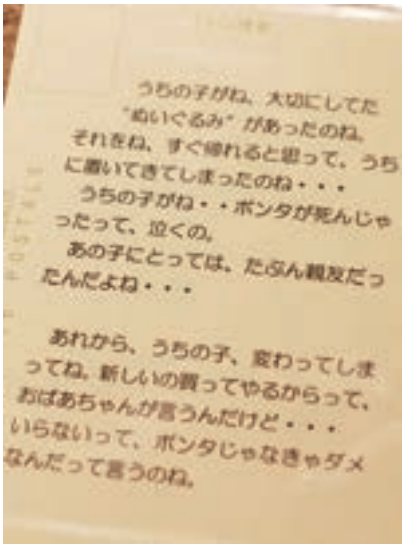
基礎しかねえし、どごが誰の家だが、さっぱり分かんねんだでば。そんでも、玄関だの、風呂場だののタイルあるでしょ。あいづで分かんだね。俺もさぁ、そんで分かったのよ。手のひらくらいの欠片でも、家だがらねぇ。

残ったのそれだけだでば。

被災物「タイル片」（気仙沼市・南三陸町各所／2012.3.30～4.20）と被災物に添えられたテキスト

キーワードパネル―写真パネルと並行して展示している

被災物「ぬいぐるみ」（気仙沼市内の脇 2 丁目／2012.3.23）




被災物に添えられたテキスト

50th KESENNUMA MOTOYOSHI

# 第４編

# 資料編

火災・救急統計 ―49

リアス・アーク美術館統計 ―51

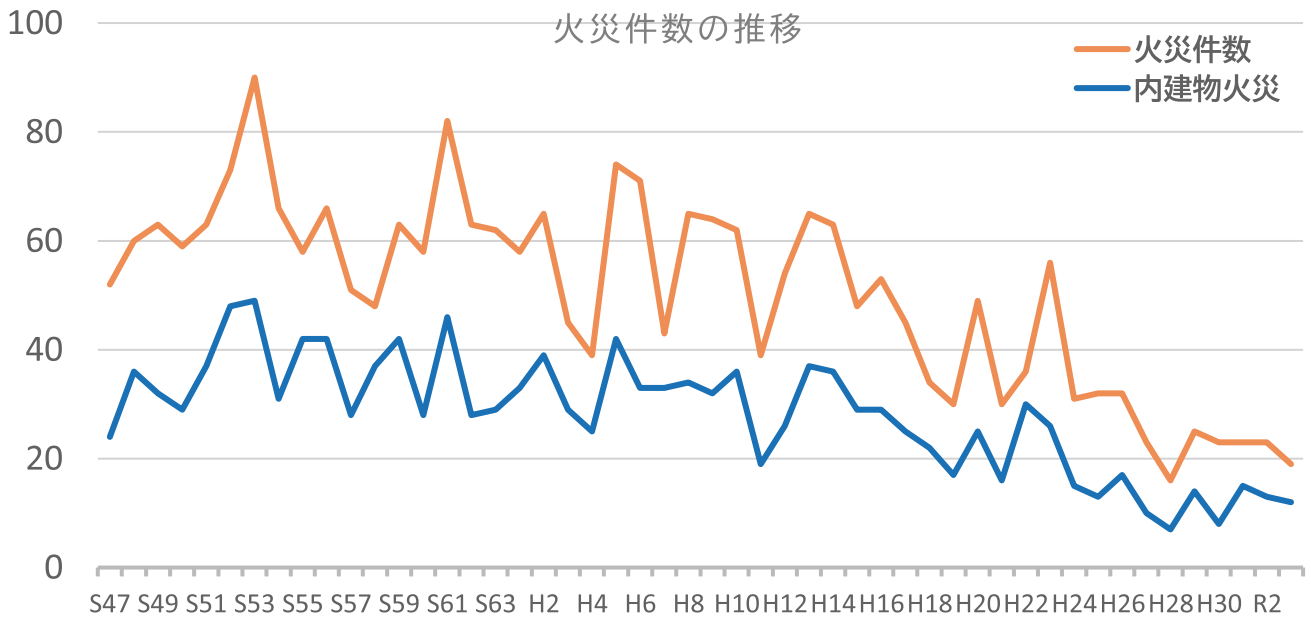
# 火災統計　―火災件数推移

【単位：件】

| 年 | 火災件数 | 内建物火災 |
|---|---|---|
| 昭和47年 | 52 | 24 |
| 48年 | 60 | 36 |
| 49年 | 63 | 32 |
| 50年 | 59 | 29 |
| 51年 | 63 | 37 |
| 52年 | 73 | 48 |
| 53年 | 90 | 49 |
| 54年 | 66 | 31 |
| 55年 | 58 | 42 |
| 56年 | 66 | 42 |
| 57年 | 51 | 28 |
| 58年 | 48 | 37 |
| 59年 | 63 | 42 |
| 60年 | 58 | 28 |
| 61年 | 82 | 46 |
| 62年 | 63 | 28 |
| 63年 | 62 | 29 |
| 平成元年 | 58 | 33 |
| 2年 | 65 | 39 |
| 3年 | 45 | 29 |
| 4年 | 39 | 25 |
| 5年 | 74 | 42 |
| 6年 | 71 | 33 |
| 7年 | 43 | 33 |
| 8年 | 65 | 34 |

| 年 | 火災件数 | 内建物火災 |
|---|---|---|
| 平成9年 | 64 | 32 |
| 10年 | 62 | 36 |
| 11年 | 39 | 19 |
| 12年 | 54 | 26 |
| 13年 | 65 | 37 |
| 14年 | 63 | 36 |
| 15年 | 48 | 29 |
| 16年 | 53 | 29 |
| 17年 | 45 | 25 |
| 18年 | 34 | 22 |
| 19年 | 30 | 17 |
| 20年 | 49 | 25 |
| 21年 | 30 | 16 |
| 22年 | 36 | 30 |
| 23年 | 56 | 26 |
| 24年 | 31 | 15 |
| 25年 | 32 | 13 |
| 26年 | 32 | 17 |
| 27年 | 23 | 10 |
| 28年 | 16 | 7 |
| 29年 | 25 | 14 |
| 30年 | 23 | 8 |
| 令和元年 | 23 | 15 |
| 2年 | 23 | 13 |
| 3年 | 19 | 12 |

火災件数は、広域消防発足以降、ほぼ微増の増加傾向で推移していたが、昭和53年の宮城県沖地震により90件の火災が発生し、その件数は、50年を経過した現在においても、過去最高の火災件数となっている。その後は、増加と減少を繰り返しながら推移し、昭和61年には、過去2番目に多い82件を記録している。平成5年には、過去3番目に多い74件を記録したが、その後は相対的に見ると減少傾向といえる。平成23年の東日本大震災により、56件の火災件数を記録しているが、その後は30件程度で推移し、平成28年には広域消防発足後、過去最少件数の16件を記録している。以降は20件前後の火災件数となっており、広域消防発足当初から平成26年頃までと比較すると火災件数は減少しているといえる。

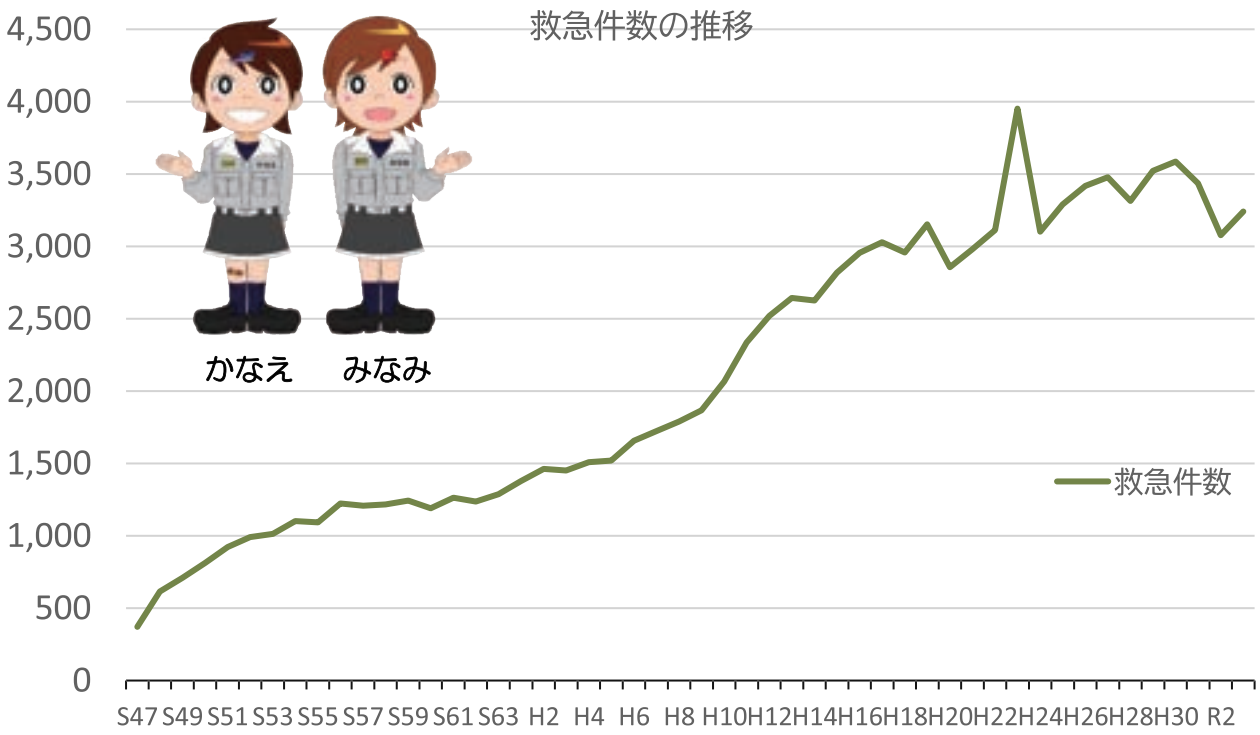


# 救急統計　―救急件数推移

【単位：件】

| 年 | 救急件数 | 年 | 救急件数 |
|---|---|---|---|
| 昭和47年 | 371 | 平成9年 | 1,867 |
| 48年 | 616 | 10年 | 2,067 |
| 49年 | 711 | 11年 | 2,336 |
| 50年 | 811 | 12年 | 2,520 |
| 51年 | 923 | 13年 | 2,644 |
| 52年 | 992 | 14年 | 2,626 |
| 53年 | 1,013 | 15年 | 2,818 |
| 54年 | 1,101 | 16年 | 2,955 |
| 55年 | 1,093 | 17年 | 3,028 |
| 56年 | 1,224 | 18年 | 2,957 |
| 57年 | 1,209 | 19年 | 3,153 |
| 58年 | 1,216 | 20年 | 2,857 |
| 59年 | 1,243 | 21年 | 2,979 |
| 60年 | 1,190 | 22年 | 3,113 |
| 61年 | 1,264 | 23年 | 3,952 |
| 62年 | 1,237 | 24年 | 3,101 |
| 63年 | 1,287 | 25年 | 3,290 |
| 平成元年 | 1,379 | 26年 | 3,417 |
| 2年 | 1,462 | 27年 | 3,478 |
| 3年 | 1,452 | 28年 | 3,314 |
| 4年 | 1,509 | 29年 | 3,522 |
| 5年 | 1,521 | 30年 | 3,587 |
| 6年 | 1,657 | 令和元年 | 3,435 |
| 7年 | 1,724 | 2年 | 3,077 |
| 8年 | 1,789 | 3年 | 3,240 |

救急件数は、広域消防発足以降、微増ながら増加傾向で推移している。平成17年からは、増加と減少を繰り返しながら推移していたが、平成23年の東日本大震災により、過去最高の救急件数を記録した。その後は、増加と減少を繰り返しながら推移している。



# リアス・アーク美術館統計　―年度別入館者数集計表

（単位：人）

| 区　分 | 開館実日数（単位：日） | 有　料（減免も含む） | | | | | | | 無　料 | | | | 合　計 | 一日平均入館者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 一　般 | | 大　高　生 | | 中　小　生 | | 小　計 | 招　待 | 視察・見学・その他 | ワークショップ | 小　計 | | |
| | | 個　人 | 団　体 | 個　人 | 団　体 | 個　人 | 団　体 | | | | | | | |
| 平成6年度 | 93 | 7,249 | 761 | 412 | 0 | 1,165 | 21 | 9,608 | 978 | 1,052 | — | 2,030 | 11,638 | 125 |
| 平成7年度 | 237 | 12,891 | 1,657 | 710 | 73 | 2,146 | 106 | 17,583 | 2,819 | 5,133 | — | 7,952 | 25,535 | 108 |
| 平成8年度 | 242 | 10,856 | 1,749 | 553 | 107 | 1,332 | 72 | 14,669 | 2,520 | 8,586 | — | 11,106 | 25,775 | 107 |
| 平成9年度 | 243 | 7,362 | 1,491 | 453 | 35 | 886 | 157 | 10,384 | 2,207 | 5,846 | — | 8,053 | 18,437 | 76 |
| 平成10年度 | 241 | 5,062 | 1,030 | 369 | 306 | 454 | 109 | 7,330 | 1,582 | 4,360 | 511 | 6,453 | 13,783 | 57 |
| 平成11年度 | 244 | 4,871 | 976 | 254 | 39 | 551 | 34 | 6,725 | 1,383 | 9,684 | 1,204 | 12,271 | 18,996 | 78 |
| 平成12年度 | 237 | 4,755 | 1,155 | 257 | 394 | 341 | 47 | 6,949 | 2,086 | 7,948 | 1,299 | 11,333 | 18,282 | 77 |
| 平成13年度 | 241 | 5,724 | 673 | 996 | 124 | 802 | 174 | 8,493 | 2,953 | 9,062 | 1,158 | 13,173 | 21,666 | 90 |
| 平成14年度 | 245 | 5,323 | 1,128 | 351 | 172 | 331 | 67 | 7,372 | 1,814 | 13,191 | 1,269 | 16,274 | 23,646 | 97 |
| 平成15年度 | 249 | 4,169 | 513 | 205 | 91 | 259 | 139 | 5,376 | 1,573 | 27,086 | 1,291 | 29,950 | 35,326 | 142 |
| 平成16年度 | 241 | 5,002 | 371 | 201 | 138 | 362 | 5 | 6,079 | 2,037 | 23,714 | 1,000 | 26,751 | 32,830 | 136 |
| 平成17年度 | 242 | 3,911 | 403 | 215 | 74 | 368 | 17 | 4,988 | 455 | 25,697 | 966 | 27,118 | 32,106 | 133 |
| 平成18年度 | 244 | 5,494 | 724 | 278 | 79 | 702 | 132 | 7,409 | 369 | 32,907 | 1,576 | 34,852 | 42,261 | 173 |
| 平成19年度 | 249 | 4,109 | 458 | 200 | 102 | 429 | 8 | 5,306 | 361 | 27,363 | 1,274 | 28,998 | 34,304 | 138 |
| 平成20年度 | 200 | 4,232 | 489 | 237 | 64 | 465 | 8 | 5,495 | 378 | 13,371 | 1,087 | 14,836 | 20,331 | 102 |
| 平成21年度 | 256 | 3,603 | 484 | 291 | 107 | 206 | 34 | 4,725 | 307 | 32,516 | 1,583 | 34,406 | 39,131 | 153 |
| 平成22年度 | 232 | 3,116 | 328 | 127 | 95 | 41 | 0 | 3,707 | 165 | 33,074 | 1,388 | 34,627 | 38,334 | 165 |
| 平成23年度 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 平成24年度 | 164 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15,772 | 127 | 15,899 | 15,899 | 97 |
| 平成25年度 | 252 | 584 | 103 | 42 | 21 | 64 | 1 | 815 | 53 | 68,638 | 368 | 69,059 | 69,874 | 277 |
| 平成26年度 | 249 | 8,735 | 3,188 | 1,220 | 711 | 426 | 161 | 14,441 | 801 | 35,586 | 272 | 36,659 | 51,100 | 205 |
| 平成27年度 | 250 | 7,474 | 2,236 | 1,034 | 626 | 363 | 130 | 11,863 | 635 | 40,066 | 272 | 40,973 | 52,836 | 211 |
| 平成28年度 | 246 | 5,866 | 2,137 | 1,741 | 392 | 610 | 142 | 10,888 | 360 | 29,253 | 190 | 29,803 | 40,691 | 165 |
| 平成29年度 | 246 | 3,933 | 2,473 | 1,147 | 319 | 656 | 285 | 8,813 | 405 | 34,772 | 164 | 35,341 | 44,154 | 179 |
| 平成30年度 | 251 | 4,125 | 2,667 | 1,389 | 352 | 695 | 196 | 9,424 | 478 | 37,706 | 202 | 38,386 | 47,810 | 190 |
| 令和元年度 | 255 | 3,116 | 2,599 | 564 | 615 | 306 | 353 | 7,553 | 207 | 33,117 | 357 | 33,681 | 41,234 | 162 |
| 令和2年度 | 223 | 1,429 | 881 | 195 | 269 | 150 | 47 | 2,971 | 30 | 8,495 | 121 | 8,646 | 11,617 | 52 |
| 令和3年度 | 246 | 1,763 | 974 | 319 | 160 | 137 | 138 | 3,491 | 62 | 21,989 | 237 | 22,288 | 25,779 | 105 |
| 累　計 | 6,318 | 134,754 | 31,648 | 13,760 | 5,465 | 14,247 | 2,583 | 202,457 | 27,018 | 605,984 | 17,916 | 650,918 | 853,375 | 135 |

※ワークショップ利用者は、平成9年度まではその他として集計
※平成23年度は、東日本大震災による建物の一部損壊により休館
※平成24年度は、7月28日より一部開館（常設展観覧料は無料）
※平成25年度より全部開館（平成25年度中は、常設展観覧料は無料）
※新型コロナウイルス感染拡大防止の為、令和2年4月8日から令和2年5月10日まで臨時休館

## 入館者数（5万人単位）達成日

| | |
|---|---|
| 5万人達成 | 平成　8年　9月　1日（日） |
| 10万人達成 | 平成 11年　8月　5日（木） |
| 15万人達成 | 平成 13年 12月 23日（日） |
| 20万人達成 | 平成 15年 11月　1日（土） |
| 25万人達成 | 平成 17年　6月　2日（木） |
| 30万人達成 | 平成 18年　9月 13日（水） |
| 35万人達成 | 平成 20年　2月 10日（日） |
| 40万人達成 | 平成 21年 11月 14日（土） |
| 45万人達成 | 平成 23年　2月　9日（水） |

| | |
|---|---|
| 50万人達成 | 平成 25年　9月 20日（金） |
| 55万人達成 | 平成 26年　6月 25日（水） |
| 60万人達成 | 平成 27年　7月 19日（日） |
| 65万人達成 | 平成 28年　7月　1日（金） |
| 70万人達成 | 平成 29年　9月 28日（木） |
| 75万人達成 | 平成 30年 10月 11日（木） |
| 80万人達成 | 令和 元年 10月 24日（木） |
| 85万人達成 | 令和　4年　2月 12日（土） |

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合設立・消防本部発足 50 周年記念誌　発行＝気仙沼・本吉地域広域行政事務組合

庁是
信頼される消防
庁訓

一 誠実さと責任感の強い積極果敢に行動する消防
一 礼節と法規遵守を重んずる消防
一 身心の健康と清潔に明るい活力ある消防
一 敬愛と感謝奉仕する消防
一 創意工夫と自己啓発の心に満ち信頼される消防

編集＝同組合事務局/消防本部/リアス・アーク美術館　発行日＝令和 4 年 10 月 28 日　気仙沼・本吉地域広域行政事務組合　〒988-0104 宮城県気仙沼市赤岩五駄鐙 43 番地 2　Tel:0226-22-9111　Fax:0226-22-8008

＊本冊子に掲載されている図版等の無断転用を固く禁じます　©Kesennuma-Motoyoshi area integrated administration of a large region office work association

印刷/双葉印刷株式会社

E-mail:kouiki@km-fire.jp　法人番号:2000020049387　開庁時間:8:30 から 17:15 まで（土・日・祝日、年末年始 12 月 29 日から 1 月 3 日を除く）

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合紋章

広域組合の「**広**」の文字をデザインし、頂点の三角は「**山**」を、中央の二本の横線は「**海**」を、右上の突き出た部分は「**進歩**」を、全体の円形は「**協調**」を表現している。